

怪しの館

国枝史郎

青空文庫

ここは浅草の奥山である。そこに一軒の料理屋があつた。その奥まった一室である。四人の武士が話している。

夜である。初夏の宵だ。

「どうしても誘拐かどわかす必要がある」

こういったのは三十年輩の、いやらしいほどの美男の武士で、寺侍かとも思われる。俳優といつてもよさそうである。衣裳も持ち物も立派である。が、寺侍でも俳優でもなく、どうやら裕福の浪人らしい。

「どうして誘拐いたしましたしょう？」

こうきいたのは三十二、三の武士で、これは貧しい浪人らしい。左の小指が一本ない。はたしあいにもまけて切られたのだろう。全体が卑しく物ほしそうである。

「そこはお前達工夫をするさ」

美男の武士はそつけない。

「どうしたものかの？」

と小指のない武士は、一人の武士へ話しかけた。誘拐の相談をしたのである。

「さればさ」

といったのは、二十八、九の、これも貧しげで物ほしそうで、そうして卑しげな浪人であつたが、頤にやけどのあとがあつた。「姿をやつして立ち廻り、外へ出たところをさうがよかろう」

「駄目だ、駄目」

と抑えたのは例の美男の武士であつた。

「期限があるのだ、誘拐の期限が。それを過ぎすと無駄になる。外へ出たところをさうなどと、悠長なことはしていられない。今夜だ、今夜だ、今夜のうちにさらえ」

「では」

といったのはもう一人の武士で、四十がらみで薄あばたがあり、やはり同じく浪人と見え、衣裳も大小もみすぼらしい。

「ではともかくも姿をやつし、屋敷の門前を徘徊し、様子を計って忍び込み、何とか玉を引き上げましょう」

「それがよからう。ぜひに頼む」——美男の武士はうなずいた。「しかし一方潜入の方も、間違いないように手配りをな」

「この方がかえつて楽でござる」こういったのはやけどのある武士で、「人殺し商売は慣れておりますからな」

「それにさ」と今度は薄あばたのある武士が、「敵には防備もないそうで」

「うん」といったは美男の武士である。「それに相手そのものが、一向腕ききではないのだからの」

「とはいえ聡明な人物とか、どんな素晴らしい用心を、いたしておるかもしれませんな」
やけどのあとのある武士である。

「そうだそうだ、それは判らぬ」美男の武士は合槌をうった。「で、十分いい含めてな」

「よろしゅうござる。大丈夫でござる。……島路、大里、矢田、小泉、これらの手合いへも申し含めましょう。……いや實際あの連中と来ては、飯より人殺しが好物なので」

「それはそうと花垣殿」ニヤニヤ笑いながら美男の武士へ、こういったのは薄あばたのある武士、「報酬に間違いはありますまいな」

すると花垣と呼ばれた武士は——その名は志津馬というのであったが、さも呑み込んだ

というように、ポンとばかりに胸を打った。「大丈夫だよ、安心するがいい」

「これはそうなくてはなりません。濡れ手で粟のつかみ取り——という次第でございますからな」

「その代わりこいつが失敗すると」花垣志津馬不安そうである。「あべこべに相手にしてやられる」

「だからわれわれを鞭撻し、十分にお働かせなさるがよろしい」ちよつと凄味を見せたのは、指の欠けている武士であった。

「というのはどういう意味なのかな？」

ちやアんと分つておりながら、知らないように志津馬がいう。

「いただきたいもので、前祝いを」

「酒はさつきから飲んでいるではないか」

こういいながら花垣志津馬は飲み散らした杯盤を眺めやった。

と、ハツハツという笑声が、三人の口から同時に出た。

「酒も黄金の色ではあるが、ちと、その、どうも水っぽくてな」

「チャリンチャリンと音のするやつを」

「なんだなんだ、金がほしいのか」

今気がついたというように、花垣志津馬は苦笑したが、

「持つてけ持つてけ。……分ける分ける」

「これは莫大……」

「十両ずつかな」

「後へ二十両残りそうだ」

「うん、しめて五十両か」

安浪人め、三人ながら、手を延ばすとあわててひつつかんだが、ちようどこの頃一軒の屋敷の、一つの部屋で一人の武士が誰にともなく話しかけている。

二

「みんなお前が悪いのだ。俺は怨む、お前を怨む。またある意味では憐れんでもいる。……嫉妬！ そうだ、その嫉妬が、一切お前を眩ませたのだ。そのくせどうだ、お前自身は？ 好色そのもののような生活だったではないか！ 俺は随分我慢した。最後まで我慢し

たといつてもいい。そうしていまだに我慢している。……永い間の受難だった。いや、いまだに受難なのだ。俺ばかりではない。娘もだ！ それをさえお前は餌にした。嫉妬の餌に！ お前の嫉妬！ ……だが俺は守つて来た、お前の意志を守つて来た！ もちろん素晴らしい財産の、継承のためには相違ないが、それより一層俺としては、娘の幸福を願つたからだ。というとお前はいうかもしれない、『その娘が！』『その娘が！』と！ ……が、俺はハッキリという、娘は要するに娘だと！ それ以外には意味はない！ それへ疑がいをかけるとは！ それでも母か！ それでも妻か！ ……もちろん、彼女はよい娘だ。愛すべき娘には相違ない。で俺は愛したのだ。だがその愛は純なものだ。お前が『あいつ』を愛したそれと、どうして比較出来るものか！ 『あいつ』は実に悪人だ。『あいつ』はその後手を変え、品を変え、我々二人を迫害した。そうして今でも迫害している。で、安穩はなかったのだ！ しかしとうとう漕ぎ付けた。今日という日まで漕ぎ付けた。今夜さえ過ごせばもうよかろう。勝利はこつちのものになる。そうしたら俺達は自由になる。お前の意志から解放される。明るい日の目も見られるだろう。……それにしても俺は忘れない。俺達を縛つた四カ条を！ あれは普通の人間には考えも及ばぬ残酷なものだ。巧妙なものといつてもいい。……破壊せこわばいくらでも破壊される！ 手間暇もいらず簡単に、し

かも何らの非難も受けず——ところが俺には出来なかつた。そういうことの出来ないように、いつか『慣らされ』てしまったからだ。それをお前は知っていた。そこでそいつへ付け込んだのだ。そうしてああいう条件を、俺の眼前へ出したのだ。……そこで、俺はハッキリという、お前は俺が良心のために、——俺の持っている良心のために——もがき苦しむのを見ようとして、ああいう条件を出したのだと！　そうしてそれは成功した。で俺は苦しんだよ」

突然ここで武士の声は、悲しそうな呻くような調子となつた。

「良心のない者は幸福だ。それは何物にもとらえられないから」

ここで一層武士の声は、悲しそうな調子を帯びて来た。

「ところが俺は持っていた。だから締め木にかけられたのだ！　お前だお前だ、掛けたものは——」

武士の姿は解らない。部屋に燈火がないからである。

闇黒の中で誰にもなく、呼びかけ話しかけているのである。

独立をした建物である。

建物の周囲は庭園である。

樹木がすすくすすくと繁っている。

だが月光がさしている。

その月光に照らされて、その建物がぼんやりと見える。一所瓦屋根が水のように光り、一所白壁が水のように光り、その外は木蔭にぼかされている。

その中でしゃべっているのである。

広大な母屋が一方にある。そこから廻廊が渡されてある。

と、その廻廊の一所へ、ポツツリと人影が現われた。

若い娘の姿である。

建物に向かって声をかけた。

「お父様、お父様！」

肩の辺に月光がさしている。で、そこだけが生白く見える。

「お父様、お父様！」

——すると、建物の戸口から、ポツツリと人影が現われた。

戸口と廻廊とは続いている。

現われたのは武士であった。

しやべっていた武士に相違ない。

ちやうど廻廊の真ん中どころで、二つの人影はいきあつた。そこへは月光がさしてない。で、姿はわからない。

ただ、声ばかりが聞こえて来る。

「いよいよ今晚でございます。今晚限りでございます」

こういつたのは娘らしい。

「ああそうだよ、今晚だよ。そうして今晚限りだよ」

こういつたのは武士らしい。

と、しばらく無言であつた。

三

ザワ、ザワ、ザワと音がする。木立へ宵の風が渡るらしい。

泉水の水が光っている。月が照らしているからだろう。

泉水の向こう側がもり上がっている。大きな築山でもあるのだろう。その頂きがぬれて

いる。月光がこぼれているからだろう。パタ、パタ、パタ……パタ、パタ……水鳥の羽音が聞こえて来る。泉水に飼われているのだろう。

一団の真つ白の叢が見える。築山の裾に屯ろしている。ユラユラユラユラと揺れ動く。と、芳香が馨つて来た。

牡丹が群れ咲いているのらしい。

と、娘の声があった。

「今夜も行かなければなりませんまいか」悲しんでいるような声である。

「お行きお行き、行つておくれ」これは武士の声であった。

「それもお前のためなのだから」

「ああ」と娘の声があった。「どうでもよいのでごぎいます。私のためなど、私のためなど」

咽び泣くような声であった。

「ただ私はお父様のために……」

「娘よ」と武士の声があった。「同時に私のためにもなるよ」

「参るどころではごぎいません。お父様のおためになりますのなら」

「ここでまたもや声が絶えた。」

で、ひっそりと静かである。

ピシツ！ と刎ねる音がした。

泉水で鯉でも刎ねたのだろう。

やっぱり静かだ。風も止んだ。

と、また娘の声が出た。

「恋の囀おとり！ 恋の囀！」

「いや」とすぐに武士の声が出た。「幸福の囀！ 幸福の囀！」

だが娘は反対らしい。「金の囀でございます！」

「仕方がないのだ、そういうことも。……この世に生きている以上はな」

「でもいつまでもお父様と、一緒に暮らすことが出来たら……」娘の声は思慕的であった。

「思うところはございません」

「それが……」と武士の声が出た。たしなめるような声であった。「こういう受難を産んだのだよ」

「可哀そうな可哀そうなお母様！」

「だが私達も可哀そうだった」

「^{しいた}虐げられたのでございませうから」

「で、それから逃がれなければならぬ。そうしてその上へ出なければならぬ」

「逃がれなければなりません。その上へ出なければなりません」

「で、お前は行かなければならぬ」

「弁吉、右門次、左近を連れて……」

「そうだ、そうして、その上で、所作をしなければならぬのだ」

「同じようなことを、長い間……」

「目つからないからだよ、適当な人が……」

「恐らく生涯目つかりますまい」

「目つけないければならぬよ。……それも今夜！ 今夜限りに！」 武士の声には真剣さがあつた。

「でも、お父様のある限りは……」 こういった娘の声の中には、いよいよ思慕的の響きがある。

と、泣き声が聞こえて来た。

娘が泣いているのらしい。

まだ宵である。で静かだ。屋敷は郊外にあるらしい。

「行つておいで！」と武士の声でした。

「はい」と娘の声がした。

後は森閑と静かである。

間もなく門の開く音がして、それが遠々しく聞こえて来たが、すぐに閉じる音がした。

武士だけが一人立っている。じつとうなだれて考えている。肩の辺に月光がさしている。

と女の呼ぶ声がした。

「今夜はお遁がしいたしません」

「うむ、お前か、うむ、島子か」

「はい」

と女が現われた。中年者らしい女である。

廻廊を伝つて寄つて来た。

「はつきりご返辞してくださいまし」

四

ここに一人の武士があつた。

微禄ではあつたが直参であつた。といったところだかか御家人、しかし剣道は随分たつしやで、度胸もあれば年も若かつた。悪の分子もちよつとあり、侠気もあつてゴロン棒肌でもあつた。名は結城旗二郎、欠点といえば美男ということ、これで時々失敗をした。

「アレーツ……どなたか！ ……助けてくださいよーッ」女の悲鳴が聞こえて来た。

お誂え通りわるが出て、若い女をいじめているらしい。

「よし、しめた、儲かるかもしれない」

で、旗二郎駆け付けた。

案の定というやつである、ならずものらしい三人の男が、一人の娘を取りまいていた。

「これ」といったが旗二郎、「てんごうはよせ、とんでもない奴らだ！」

「何を！」

と三人向かつて来た。

「何をではない、てんごうは止めろ」

「何を！」

と一人飛び込んで来た。

「馬鹿め！」

と抜いた旗二郎、ピツシリ、平打ち、撲り倒した。

「野郎！」

ともう一人飛び込んで来た。

「うふん」

ピツシリ、撲り倒した。

「逃げろーッ」

三人、逃げてしまった。

「あぶないところで、怪我はなかったかな？」　こういう場合の紋切り型だ、旗二郎娘へ声を掛けた。

すると娘も紋切り型だ。「はい有難う存じました。お蔭をもちまして幸いどこも……」
「若い娘ごが一人歩き、しかもこのような深夜などに……」　これもどうにも紋切り型である。

「送つて進ぜよう、家はどこかな？」どこまでいっても紋切り型である。ところがそれが破壊されてしまった。紋切り型が破壊されたのである。

「屋敷はここでございます」

二人の前に宏大な屋敷が、門構え厳めしく立っていたが、それを指差していったからである。

「ははあ」といったものの旗二郎、化かされたような気持ちがあった。「それではご自分の屋敷の前で、かどわかされようとなされたので？」

「はいさようでございます」

「つまらない話で」と鼻白んだ。せつかくの武勇伝も駄目になったからだ。「が、それにしても迂濶^{うかつ}千万！ ……何さ何さあなたではござらぬ。あなたの家の人達のことです。 ……あれほど悲鳴を上げられたのに、出て来られぬとはどうしたもので」こうはいったものの馬鹿らしくなった。（そんなことどうだつていいではないか。こっちにかかわりあることではない。先様のご都合に關することだ）「では送るにも及びますまいな」（あたりまえさ！）とおかしくなった。（十足もあるけば家の中へはいれる）「ご免」といいすてるとあるき出した。（どうもいけない、儲けそこなつたよ）

だがその時娘がとめた。「どうぞお立ち寄りくださいまし。お礼申しとう存じます。あの、父にも申しまして」それから門をトントンと打った。「爺や爺や、あけておくれ」「へーい」と門内から返辞があつて、すぐ小門がギーと開いたが、「お侍様え、おはいりなすつて。……さあお嬢様、あなたからお先へ」

「はい」と娘、内へはいった。「どうぞお立ち寄りくださいまし」これは門内からいったのである。

結城旗二郎いやになつた。「『爺や爺やあけておくれ』『へーい』ギー、門があいて、『お侍様えおはいりなすつて』これではまるで待つていたようなものだ。おかしいなア、どうしたというのだ、薄つ気味の悪い屋敷じゃアないか」

で改めて屋敷を見た。一町四方もあるだろうか、豪勢を極めた大伽藍、土塀がグルリと取り廻してある。塀越しに繁った植え込みが見える。林といつてもよいほどである。

「この屋敷へノコノコはいつて行くには、俺のみなりは悪過ぎるなあ」

中身は銘ある長船ななふねだが、剥げチヨロケた鞆の拵えなどが、旗二郎を気恥ずかしくさせたのである。

とまた娘の声がした。「お礼申しとう存じます、どうぞお立ち寄りくださいまし」

「度胸で乗り込め、構うものか」

で旗二郎入り込んだが、これから大変なことになった。

五

ここは屋敷の一室である。

三十五、六の武士が、旗二郎を相手に話している。

「ようこそお助けくださいました。千万お礼を申します。あれは娘でございましてな、名は葉末、年は二十歳、陰気な性質ではございますが、その本性はしっかりもののでござる。

……迂濶と申せば迂濶の至りで、自分自身の屋敷の前で、かどわかされようと思いましたので。とはいえどうもこの屋敷、ご承知の通り甚だ手広く、たとえ門前で悲鳴いたしても、母屋へまでは容易に聞こえず、困ったものでございます。……おおおこれは申し遅れませんでした、拙者ことは当屋敷の主人、三蔵^{みくら}琢磨にございます。本年取つて三十五歳、自分は侍ではございますが、仕官もいたさず浪人者で、それに性来書籍が好きで、終日終夜紙魚^{しみ}のように、文字ばかりに食いついております次第、隠居ぐらし、隠遁生活、それこそ庭下駄

を穿かないこと、二十日間にもわたろうかという、そんな生活をいたしております。……
 ははあ、あなた様でございましたか、なるほどなるほどご浪人で、ほほうお名前は結城旗
 二郎殿で、で、お年は？ 二十三歳？ それはそれは、ちようどよろしい。二十歳と二十
 三歳、全く頃加減でございますからな。……ほほうさようで、御家人の御身で、天下の直
 参、まことに結構、何んの申し分がありません。……ははあご家計はご不如意とか？
 なんのなんのそのようなこと、問題になることではございません。……家計と申せば当家
 などは、それこそ人の羨むほど、豊かなものではございますが、そのためかえって煩い多
 く、敵さえあるのでございますよ。……が、まずそれはそれとして、もはや深夜でござい
 ますので、なにとぞ別室でお休みあつて、明朝ゆるゆるお話をな。……いやはやこれはと
 んでもない、ご内室の有無も承わらず、おとめしようとは失礼いたしてござる。しかしど
 うやら拝見しましたところ、ご独身のように存ぜられますが。……あツ、さようで、それ
 は幸い、やはりご独身でございましたかな。何から何までよい具合で。……それに大變武
 芸にも勝れ人品もよく骨柄もよく、お立派なものでございますよ。……ええととところで今
 夜でござるが、ひよつとかすると当屋敷へ、襲つて来る人間があるやも知れず、ええその
 際にはご武勇をな、ぜひともお揮い願いたいもので。……ええとそれからもう一つ、ひよ

つとかすると当屋敷に、ちよつと変わった事件が起こり、お驚かせするかも知れませぬが、決して決してご介意なく、安心してお泊まりくださるよう」

三蔵琢磨というこの家の主人、こんな具合に話すのであった。

その琢磨の風貌だが、まことに立派なものであった。

艶々しい髪を総髪に結び、バラ毛一筋こぼしていない。広い額、秀でた眉、——それがノンビリと一文字である。軟らか味を持ち冴え返り、人情と智恵とを兼有したような、非常に美しい穏かな眼。鼻の高さ形のよさ、高尚という言葉さながらである。どこか女性的の小さな口。唇は刻薄に薄くもなく、さりとして卑しく厚くもない。で、やつぱり立派なのである。豊かな垂れ頬、ひきしまつた頤、厚い耳たぶ、長目の首、総体が華奢きゃしゃで上品で、そうして何んとなく学者らしい。体格は中肉中身長せである。顔に負けない品位がある。着流しの黒紋付き、それで端然と坐っている様子は、安く踏んでも大旗本である。品位と貫禄と有福と、智恵と人情とを円満に備えた、立派な武士ということが出来る。

だが一つだけ不思議なのは、そのいうことやいう態度に、おちつきのないことであつた。どことなく何んとなくオドオドしている。何物をか恐れているようである。いつている言葉にも矛盾がある。そうしていわないでもよいようなことまで、いつているようなところ

がある。といつてもそれが悪い心から、発しているものとは思われない。で、もちろん、加工的でもない。自然とそんなようになるのらしい。だからいよいよ変なのである。

何かに脅えているのらしい。何かに縋ろうとしているのらしい。助けられたがっているのらしい。——つまりそんなように見えるのであった。

「どうも不思議な人物だな。……変なところへ入り込んでしまった」

結城旗二郎は気味悪くなつた。

「俺の意志など勘定にも入れず、勝手に決めてしまうのだからな。……俺が泊まろうともいわない先に、勝手に泊まることに決めてしまった。……が、どっちみちこの人物、悪党でないことは確からしい。で、この点は安心だ。いやいや悪党どころではない、非常に勝れた人物らしい。……だがそれにしても変だなあ、娘の親だとはいうけれど、ちつとも二人とも似ていないではないか。それにさ少し若過ぎる。娘の親としては若過ぎる。二十歳の娘に三十五歳の親。とすると十五で出来た子だ。女が十五で子を産むはいいが、男親の方が十五歳で子を産ませるとは早過ぎる。……といつて、もちろん世の中に、全然ないことではないけれどな。……それにしても娘はどうしたんだろう？ ちつとも姿を見せないではないか。……それにさこんな途方もない、立派な広い屋敷なのに、一向召使いがい

ないらしい。考えてみれば、これも変だ。……何物か襲つて来るといふ、その時には武勇を揮つてくれという、どう考えても変な屋敷だ。……が、まあまあそれもよからう、よろしいよろしい乞われるままに、今夜この屋敷へ泊まつてやろう。何か秘密があるのだろう、ひとつそいつをあばいてやろう」

で、旗二郎泊まることにしたが、はたしていろいろ気味の悪いことが、陸續として起こつて来た。

六

通された部屋は寢所であつた。

豪勢な夜具がしいてあつた。

一通りの物が揃つていた。というのは結構な酒肴が、タラリと並べられてあるのであつた。蒔絵の杯盤、蒔絵の銚子、九谷の盃、九谷の小皿、九谷の小鉢、九谷の大皿、それへ盛られた馳走なども、凝りに凝つたものである。金屏風が一双立て廻してある。それに描かれた孔雀の絵は、どうやら応挙の筆らしい。朱塗りの行燈が置いてある。その燈火に映

じて金屏風が、眼を射るばかりに輝いている。片寄せて茶道具が置いてあり、茶釜がシンシン音立てている。

茶も飲めれば酒も飲める。寝たければ勝手に寝るがよい、寝ながら飲もうと随意である——といったように万事万端、自由に出来ているのであった。

が、一つだけ不足のものがあつた。

酌をしてくれるものがないことである。

上蒲団かけを刎ねた旗二郎、見ている者もないところから、敷蒲団の上へあぐらを組み、手酌でグイグイ飲み出したが、考え込まざるを得なかつた。

「どう考えたつて変な屋敷だ、どう思つたつて変な連中だ、からきし俺には見当がつかない。……それにさ、さっきの主人の言葉に、妙に気になる節があつた」

というのは他でもない、「二十歳と二十三歳、ちようど頃加減でございますからな」こういう主人の言葉である。

「これでは、まるでこの家の娘——そうそう葉末とかいつたようだが、それと、この俺と一緒にして、婚礼させようとしているように聞こえる。そういえば、さっき俺の身分を、それとなく尋ねたようでもあつた。いよいよ合点がいかないなあ」

グイグイ手酌で飲んで行く。

だが酔いは少しも廻ろうともしない。心気がさえるばかりである。

「家の構え、諸道具や諸調度、これから推してもこの家は、大変もない財産家らしい。いや主人もそういった筈だ、人もうらやむほどの財産家だと。……その上娘はあの通り綺麗だ。婿にでもなれたら幸福者さ」

グイグイ手酌で飲んで行く。

葉末という娘の風采が、ボツと眼の前へ浮かんで来た。月の光で見たのだから、門前はハッキリ判らなかつたが、燈火の明るい家の中へはいり、旗二郎を父親へひきあわせ、スルリと奥へひつ込んだまでに、見て取った彼女の顔形は、全く美しいものであつた。キツパリとした富士額、生え際の濃さは珍らしいほどで、鬢を冠っているのかもしれない、そんなように思われたほどである。眉毛はむしろ上がり気持ちで、描いたそのように鮮やかであつた。鼻は高く肉薄く、神経質的の点があり、それがかえって彼女の顔を、気高いものに見せていた。唇は薄く、やや大きく、その左右がキュツと緊まり、意志の強さを示していた。だが何より特色的なのは、情熱そのもののような眼であつた。どっちかといえば細くはあつたが、そうして何んとなく三白眼式で、上眼を使う癖はあつたが、その清

らかさは類稀たぐいまれで、近づきがたくさえ思われた。女としては高い身長せいせいで、發育盛りの娘としては、少し痩せすぎていることが、一方欠点とは思われたが、一方反対にそのために、姿が非常に美しく見えた。全体の様子が濃艶というより、清楚という方に近かったが、また内心に燃え上がっている、情熱の火を押し殺し、無理に冷静に構えているような、そんな様子も感ぜられた。

「あの娘と夫婦になる。どう考えたって有難いことだ」

旗二郎はこんなことを思いながら、グイグイ手酌で飲んで行った。

依然として酔いが廻らない。いよいよ眼が冴え心が冴え、とても眠気など射さそうともしない。夜がだんだん更けて行く。更けるに従って屋敷内が、いよいよ静けさを呈して来る。それにもかかわらず不思議なことには、訳のわからぬ不安の気が、旗二郎の心に感じられた。「よし」と突然どうしたのか、旗二郎は呟くと立ち上がった。取り上げたのは大小である。「どつちみち怪しい屋敷らしい。思い切つて様子を探ってみよう。一室に籠もつて酒を飲んで、事件の起こつて来るやつを、待っているのは消極的だ。こつちからあべこべに出かけて行き、屋敷の秘密を探つてやろう」

で、部屋から出て行つたが、はたして結城旗二郎、どんな怪異にぶつかったらう？

七

いつか旗二郎裏庭へ出た。

素晴らしく宏大な庭である。山の中へでもはいったようだ。

木立がか黒く繁っている。築山が高く盛り上がっている。広い泉水がたたえられてある。いたる所に花木がある。泉水には石橋がかかっている。

ずっと遙かの前方で、月光を刎ねているものがある。風にそよいでいる大竹藪だ。その奥に燈火がともっている。神の祠でもあるらしい。燈明の火がともっているらしい。

地面は苔でおおわれている。で、気味悪く足がすべる。

一所に小滝が落ちている。それに反射して月光が、水銀のようにチラチラすると、ほととぎすのなき声があった。

「まるで大名の下屋敷のようだ。その下屋敷の庭のようだ」

眩きながら旗二郎、築山のうしろまで行った時である。

築山の裾に岩組があり、その蔭から黒々と、一個の人影が現われた。

「おや」

と思つた時、掛け声もなく、スーッと何物か突き出した。キラキラと光る！ 槍の穂だ！ 黒影、槍を突き出したのである。

「あぶない！」

と思わず叫んだが、「何者！」と再度声を掛けた。とその時には旗二郎、槍のケラ首をひつ掴んでいた。

と、黒影、声をかけた。

「先刻はご苦勞、まさしく平打ち、ピツシリ肩先へ頂戴してござる。……で、お礼じゃ、槍進上！ ……そこで拙者はこれでご免！ ただしもう一人現われましょう」

スポリとどこかへ消えてしまった。

団々と揺れるものがある。雪のように真っ白い。白牡丹の叢があるのであった。黒い人影の消えた時、恐らく花を揺すつたのであろう。プーンと芳香が馨つて来た。

「驚いたなあ、何んということだ。物騒千万、注意が肝腎。……槍進上とは胆が潰れる。

……待てよ待てよ、何んとかいっただけ『先刻はご苦勞、まさしく平打ち、ピツシリ肩先へ頂戴してござる』——ははあそうするとさつき方、この家の娘を門前で、かどわかそう

とした奴だな？ ……ふうむ、それではあいつらが、潜入をしているものと見える。いよいよ物騒、うっちゃっては置けない。葉末とかいう娘のため、この庭から駆り出してやろう」

ソロソロと進むと滝の前へ出た。

そこをよぎると林である。蘇鉄そてつが十数本立っている。

と、その蔭から声がした。「これは結城氏結城氏、さつきは平打ち、いただいでござる。で、お礼！ まずこうだ！」

ポンと人影飛び出して来た。キラリと夜空へ円が描かれ、続いて鏘しょうぜん然と音がした。パツと散ったのは火花である。切り込んで来た敵の太刀を、抜き合わせた結城旗二郎、受けて火花を散らしたのである。

二人前後へ飛び退いた。

「お見事」と敵の声がした。「が、もう一人ご用心！ ご免」というと消えてしまった。

蘇鉄の頂きが光っている。月があたっているかららしい。

「ふぎけた奴らだ」と旗二郎、気を悪くしたが仕方なかった。庭は宏大、地の理は不明、

木立や築山が聳えている。どこへ逃げたか解らない。追っかけようにも追っかけようがない。

「よし」と旗二郎決心した。「もう一人出るということだ。今度こそ遁がさぬ、料理してくれよう」

だがその企ても駄目であった。

というのは旗二郎抜き身を下げ、用心しながら先へ進み、竹藪の前まで来た時である、竹藪の中から声がした。

「お手並拝見してござる。なかなかもつて拙者など、お相手すること出来ませぬ。先刻の平打ちも見事のもの、十分武道ご鍛練と見受けた。ついてはお願ひ、お聞き届けくだされ。……ずつと進むと裏門になります。そこから参るでございましょう、十数人の武士どもが。……今回こそはご用捨なく、手練でお打取りくださいますよう。……それこそ葉末殿のためでござる。また、ご主人のおためでござる。ご免」と一声！ それつきりであった。いや、ガサガサと音がした。竹藪を分けてどこともなく、どうやら立ち去ってしまったらしい。

「何んということだ」と旗二郎、本当に驚いて突つ立った。

「きやつら敵ではなかったのか。葉末殿のため、ご主人のため、こういったからには敵ではなく、味方であるとしか思われぬ……。ではなぜ切り込んで来たのであろう？ ではなぜ葉末というあの娘を、かどわかそうとしたのだろう？ 何が何んだか解らない。解っていることはただ一つだ、怪しい館だということだけだ。どうしてもこの屋敷、どうしても怪しい」

旗二郎怒りを催して来た。翻弄されたと思つたからである。

「主人のためでなからうと、娘のためでなからうと、俺は俺のために叩つ切る。来やがれ！ 誰でも！ 叩つ切る！」

で、スルスルと足音を忍ばせ、先へ進むと木立があり、それを抜けた時行く手あたり、取り廻した嚴重の土堀が見え、ガツシリとした裏門が、その一所に立っていた。

「うむ、あいつが裏門だな」

小走ろうとした時、トン、トン、トン、と、その裏門を外の方から、忍びやかに叩く音がした。

と、一つの人影が、母屋の方から現われた。意外にも女の姿である。裏門の方へ小走つて行く。で、旗二郎地へひれ伏し、じつと様子をうかがつたが、またも意外の光景を見た。

八

というのは他でもない、小走って来たその女と、門外にいるらしい男との間に、こんな話が交わされたのである。

「首尾はどうだ？」と男の声がした。

「今夜十二時……」と女の声が答えた。

「ハッキリした返辞をするそうだよ」

「ナニ十二時？」と怒ったように、「それでは少し遅いではないか」

「遅くはないよ」と女の声も、何んとなく怒っているようである。「十二時キツチリにまとまったら、何んのちつとも遅いものか」ぞんざいな伝法な口調である。

「が、一分でも遅れては駄目だ」不安そうな男の声である。

「九俣の功を一簣きに欠くよ」

「百も承知さ」と嘲笑うように、「お前さんにいわれるまでもない」

「で、どうだい？」とあやぶむように、「まとまりそうかな、その話は？」

眼の前にいる女は何者だろう？」

で、旗二郎微動もせず、なおも様子を窺^{うかが}った。

「とにかく」と男の声がした。門の外にいる男の声だ。「是が非でも成功させるがいい」
 「お前さんもさ」といい返した。門内の女がいい返したのである。「万全の策をとるがいいよ」

「いうまでもないよ」と笑止らしく、「武士を入れるよ、切り込みのな。……備えはどうだ、屋敷内の備えは？」

「宵の間に一人若い武士が、屋敷へはいつて泊まり込んでいるよ」

「え？」といったが驚いたらしい。「どんな人品だ？ 立派かな？」

「ああ人品は立派だが、御家人らしいよ。安御家人らしい」

「ふうん」といったまま黙ってしまった。

門内の女も黙っている。で、森閑と静かである。ピシッ、ピシッと音がする。泉水で鯉が跳ねたのらしい。

「俺の噂をしているわい」ニヤリと笑った旗二郎、「立派な人品とは有難いが、安御家人とは正直すぎる」——で、なお様子をうかがった。

と、男の声がした。「どつちみち油断は出来ないの。うかうかしてその御家人に、玉を取られては一大事だ。……よしよしすぐに手配りをしよう」

「それがいいよ」と女がいった。「それでは私は帰るとしよう」

そこで女は木立をくぐり、母屋の方へ帰ったが、間もなくポツツリと土塀の上へ、一つの人影が現われた。覆面をした武士である。とまたポツツリともう一つ、同じく覆面姿の武士が土塀の上へ現われた。

隠れ窺っていた旗二郎、「ははあ切り込みの武士達だな。よしよし端から叩つ切つてやろう」

——で、ソロソロと身を起こし、片膝を立てると居合い腰、大刀の柄へ手を掛けたが、プツツリと切つたは鯉口である。上半身を前のめりに、肘をワングリと鉤に曲げ、左の足を地面へ敷き、腰を浮かめたは飛び出す構え……頤を上向け額を反らし、上眼を使って睨んだは、土塀の上の人影が、飛び下りるのを狙ったのである。

「来やがれ、悪人、一人も残さぬ！ 生れて初めての人殺しだ。片っ端から退治てみせる」
心の中で呟いた時、一つの人影土塀から、スーッと庭へ飛び下りた。

とたんに、抜き打ち、旗二郎、いざつたままにスルリと出、右腕を延ばすと一揮した。

月光の射さない木影の中、そこへ全身は隠していた。が、一揮した太刀先だけは、月光の中へ出たと見える。ピカリと燐のように閃めいたが、閃めいた時にはその太刀先、木影の中へ引つ込められていた。

グツ！ といったような変な呻き、飛び下りた武士の口から出て、息詰まるような様子であったが、まず両手を宙へ上げ泳ぐような格好をしたかと思うと、ドツと前倒れにぶつ倒れた。腰から上の半身が、月光の中に晒らされている。背がムクムクと波を打つ。それにつれて肩がS形にうねる。左の胸から黒いものが、ズルズルズルズル引き出されている。昼間見たら真っ赤に見えただろう、傷口から流れ出る血なのだから。と、まったく動かなくなつた。

「どうした島路」という声があった。土塀の上のもう一人である。と、ヒラリと飛び下りた。「不覚だの、転んだのか？」

腰をかがめて覗き込んだ。

そこを目掛けて旗二郎、またもスルスルといざり出たが、今度は瞬間にスツと伸ばし、背高々と爪立ったが、こんな場合だ、卑怯ではない。声も掛けずに背後から、後脳を目掛けてただ一刀！ ザツクリ割って飛びしきった。

すぐに木影へ隠れたのである。

九

ガッ！ といったような気味の悪い悲鳴、一声立てたが切られた武士だ。枯れ木仆しにそのままに、前方へドツと仆れたので、前に仆れていた死骸の上へ、蔽うようにして転がった。

月光それを照らしている。

急所を一刀に割られたのである。躰に痙攣を起こしもせず、静まり返って死んだらしい。「二人仕止めた、これだけかな」

木影に立った旗二郎、決して決して油断はしない、血刀を下段に付けながら、眼で堀の上を見上げながら、さすがに少しばかり切迫する、胸の呼吸を静めながら、こう口の中で呟いた。

すると呟きの終えないうちに、土堀の上へ黒々と、五つの人影が現われた。同じである、覆面姿、武士であることはいまでもない。じつと地面を見下ろしたが、どうやら不思議

に思つたらしい、五人ヒソヒソ囁き出した。

と、キラキラと光り物がした。

五人ながら刀を抜いたのである。

それが月光を刎ねたのである。

「オイ」と一人の声がした。

「うむ」と答える声が出た。

「やられたらしい」ともう一人の声。

「島路と、そうして大里だ」

「そうらしいの」ともう一人。

「敵そなえに防備があるらしい」さらにもう一人の声が出た。

と、一人が振り返つた。「味方兩人してやられてござる。……いかがしましような、花垣殿？」

すると門外から返辞がした。

「防備あるのがむしろ当然。……よろしい拙者も参るとしよう。……六人同時に切り込む
といたそう」

すぐにもう一つの人影が、土塀の上へ現われた。

同一の覆面である。

「では」

というと飛び下りた。

六人一緒に集まったが、二つの死骸を調べ出した。

木影で見ていた旗二郎、「これはいけない」と考えた。「六人と一人では勝負にならぬ。引返して屋敷の人達に、このありさまを知らせてやろう」

そこで物音を立てぬよう、彼らに姿を見せぬよう、背後うしろ下がりに退いた。数間来た所でクルリと振り向き、抜き身を袖で蔽ったが、腰をかがめると木蔭づたい、母屋の方へ小走った。

築山裾まで来た時である。

「ご苦労でござった、結城氏」

こういう声が聞こえて来た。

と、すぐ別の声があった。

「我らこちらを守りましょう。願わくば貴殿、石橋を渡られ、向こうに立っている離れ座

敷、それをお守りくださるよう」

とまた別の声が出た。

「そちらに主人おりますのでな」

どこにいるのか解らない。どこかに隠れているのだろう。そうして悉^{しっかい}皆を見たのだろう。

十

「ははあ、さっきの奴らだな」

結城旗二郎察したが、問答をしている時ではない、頼まれて人を切った以上、乗りかかった船だ、最後まで、手助けをしてやろうと決心した。

「承知」

と一声簡単にいったが、築山を巡ると泉水へ出、石橋を向こうへ渡り越した。

行く手に建物が立っている。廻廊で母屋とつながっている。独立をした建物である。木立がその辺を暗めている。雨戸がピツシリ閉ざされてある。

そこまでやって来た旗二郎、グルリと周囲を見廻したが、建物のはずれの一角の、暗い所へ身をひそめた。

で、向こうをすかして見た。

が、庭木が繁っている。土塀のあり場所など解らない。したがって土塀から飛び下りた、六人の姿なども解らない。

深夜の裏庭は静かである。とはいえ殺気が漲みなぎっている。

ピシッ！ 鯉が飛んだのである。

パタパタ！ 水禽みずとりが羽搏はいたのである。

後は森然と風さええない。

だが殺気は漲みなぎっている。

「妙な運命にぶつかつたものさ」旗二郎こんな場合にも、こんなことを考える余裕があつた。

「ゆくりなく女を助けたのが、偶然人を殺す運命となつた」
おかしいようにも思われた。

「どんな儲けにありつくかしらん？」

期待されるような気持ちもした。

「美人の葉末、手にはいるかな？」

ふと思ったので嬉しくもなつた。

「養子にでもなれたら大したものだ。素晴らしい屋敷、宏大な宅地、手にはいろいろというものさ、うまうま養子になれるとな」

ニコツキたいような気持ちもした。

「とにかくウンと働くのだ。見せつけてやろうぜ、冴えた腕を。だが」と母屋の方を見た。「肝腎の娘はどうしているんだ。肝腎の主人はどうしているんだ。いやに静まっているではないか……オツ、足音！」

と耳を立てた。

シトシトと足音が聞こえて来る。だが姿はわからない。木立を縫って来るからだろう。

不意に足音が消えてしまった。

と思つた時また聞こえた。

「はてな？」と呟いたのはその足音が、二手に別れたからである。

三人ずつ二手に別れたらしい。こちらの方へ三人が来、母屋の方へ三人が、築山を巡つ

て行くようである。

「いよいよ来るか」

と旗二郎、建物の角へ背中をつけ、太刀を中段、堅固に構え、奥歯を噛みしめ呼吸をととのえ、一心に前方をすかして見た。

だんだん足音が近づいて来る。だがまだ敵の姿は見えぬ。

すると忽然、太刀打ちの音！ 築山の方から聞こえて来た。

チャリーンと一合！ つづいて数合！ それに続いて数声の悲鳴！ 向こうへ向かった敵を相手に、味方の三人が切り合ったらしい。

「ウム、やったな！ どうだ勝負は？ やったかな？ やられたかな？」

旗二郎の全身はひきしまった。「出る出る出る！ こっちへも出る！」

ブルツと武者顫むしやぶるいをした時である。前方の繁った木立を抜き、颯さっと走り出た人影があった。

三人の覆面の武士である。

「来い！」

と勇躍、旗二郎、建物の角から走り出た。

「悪漢！」

と一声、胆を奪い、真つ先に進んで来た一人を、サーツと右の袈裟に掛けた。

が、それは駄目であった。十分用心をしていたのだろう、旗二郎の太刀を横に払い、翻然斜めに飛びのいた。

「方々！」

「うむ」

「ご用心！」

三人声をかけ合つたが、抜き身を構えると三方へ開き、旗二郎を中へ取り込めようとした。

「これはいけない」

と旗二郎、ポンと飛び返ると闇の中——以前隠れていた建物の角へ、ピッタリ背中を食つつけたが、「さあて、これからどうしたものだ」

突嗟の間に思案した。

見れば三人の敵の勢、大事を取るのか早速にはかからず、且つは秘密を保とうとしてか、無駄な掛け声をかけようともせず、タラタラと三本の太刀を揃え、ジリジリ……ジリジリ

……と寄せて来る。

いずれも相当の手利きらしい。が、その中では真ん中にいる、体付きのきやしやな一人の武士が、どうやら一番未熟らしい。そのくせどうやらその人物が、彼らの仲間での首領らしい。花垣と呼ばれた人物らしい。

「よし」

と旗二郎うなずいた。「真ん中の奴を打ち取ってやろう」

で、闇中に構えながら、その男の隙を窺った。ところがそれが自ら、その人物に感じられたらしい。卑怯にもスルスルと退いた。

「こやつ」

と思つた旗二郎、卑怯な態度に気を悪くしたか、二人の敵のいるのを忘れ不覚にもツツと進み出た。

と、月光がぶっかけて来た。で、全身が露出した。

そこを狙つた二人の武士、あたかも「しめた！」といわんばかりに、呼吸を合わせて左右同時、毬のように弾はずんで切り込んで来た。

「おっ」と叫んだ旗二郎、一瞬ヒヤリと胆を冷やしたが、そこは手練だ、切られなかった。

チャリーンと一刀、右手の太刀、それを抑えると首を返し、左手の一人を一喝した。すなわち鋭く甲の声で「カーツ」とばかりにくらわせたのである。声をかけられた左手の武士、ピリツとしたらしかつたが太刀を引き躊躇するところを旗二郎、パツとばかりに足踏み違い、太刀を返すとサーツと切った。

「ワツ」という悲鳴！ カチンという音！ すなわち切られた左手の一人、得物を落とすとヒョロヒョロヒョロヒョロと、背後の方へよろめいたが、左肩を両手で押えると、二本の足を宙に刎ね、ドンと背後へぶつ倒れた。

もうその頃には旗二郎、モロにうしろへ飛び返り、以前の場所だ、建物の角、闇の中へ体を没していた。

そうしてそこから呼んだものである。「さあ来い、さあ来い！ ……さあ来い、さあ来い！」ここでゆつくりと、「来やアがれエーツ」

グツと引きつけた太刀の柄、丹田にあてたは中段の序、そこでもう一度、

「来やアがれーツ」

だがこんな場合にも、旗二郎心中で考えていた。「随分切った、働いた。儲からなければやりきれない、娘の婿になれるかな。ここの養子になれるかな？」

——それだけの余裕があつたのである。

十一

太刀音、悲鳴、「来やアがれーツ」の喚き、十分けたたましいといわなければならない。で建っている離れ座敷の中に、一人でも人がいたのなら、出て来なければならぬだろう。ところが人は出て来ない。静まり返って音もしない。それでは誰もいないのだろうか？ いやいや人はいたのである。

しかも男女二人いた。

ここは建物の内部である。

「さあご返辞なさりませ」

こういったのは女である。寝椅子の上に腹這っている。両肘で顎をささええている。乳のように白い肘である。ムツチリとして肉づきがよい。顔は妖婦！ 妖婦型である。髪をグタグタに崩している。黒い焰を思わせる。その髪に包まれて顔がある。目ばかりの顔ではあるまいか？ といったような形容詞をどうにもこの際用いなければ、到底形容出来ない

ような、そんな印象的な目をしていた。二重まぶたに相違ない。が、思うさま見開いているので、それがまるつきり一重まぶたに見える。目の中が黒く見えるのは、黒目が余りにも多いからだろう。白眼が縞をなしている。濃い睫毛まつげの陰影が、そういう作用をしているのだろう。その目が一所を見詰めている。で黒目が二つながら、目頭の方へ寄っている。で、一種の斜視に見える。斜視には斜視としての美しさがある。いや斜視そのものは美しいものだ。で、その女——島子なのであるが——その島子の人工的斜視は、妖精的に美しい。また蠱惑的こわくといつてもいい。また誘惑的といつてもいい。いやいや明きらかに彼女の目は、露骨に誘惑をしているのであった。紅を塗られた唇は尋常よりもグツと小さい。

島子は襲衣したぎ一枚である。一枚だけをひっかけている。真紅の色というものは、誘惑的ではあるけれど、あまりに刺戟があくどいため、教養ある人には好かれない。肉色こそはより一層、男の情慾をそそるものである。それを島子は着ているのである。裾と胴とに鱗型をつけた、肉色絹の襲衣なるものを！ よい体格だ！ 肥えている。腰のあたりがクリクリとくくれ、臀部がワングリと盛り上がっている。二本の足が少し開かれ、襲衣に包まれているのだろう、臀部から踵までの足の形が、襲衣を透かして窺われる。襲衣が溝を作っている。ひらかれた足のひらき目である。襲衣の襟くつが寛いでいる。で胸もとが一杯に見え

る。肋骨などあるのだろうか？ そんなようにも感じられるほど、脂肪づいた丸い厚い胸が、呼吸のために相違ない、ゆるやかに顫え動いている。

「味のよい果物がここにありません」

島子歌うようにいい出した。

「めしあがりませ、琢磨様！」

頤を支えていた左の腕を、こういいながらダラリと落とし、寝台の上へ長々と延ばした。と、襲衣の襟が捲くれ円々とした肩が現われた。連れて一方左の乳房が、タツプリと全量を現わした。さも重たそうな乳房である。

「さあご返辞をなさりませ」

こういうと島子は眼を閉じた。いや半眼に閉じたのである。と大きな眼が急に細まり、下のまぶたへ濃いかげが出来た。睫毛がかげを作ったのである。何んとひときわその眼付き、誘惑的になったことか！ 陶酔的の眼であった。恍惚とした眼であった。

と、その眼をすつかり閉じ、支えていた右手を頤から取ると、島子はガツクリ首を垂れた。寝椅子へ額を押しあてて、ベツタリ臥伏^{うつぶ}せに寝たのである。襲衣の襟が楔^{くさび}形^{がた}に、深く背の方へひかれたためか、背筋まで見せて頸足が、ろくろっ首のように長くなった。

そこへ髪の毛がもつれている。髪の毛の間からヌラヌラと、白い艶のよい肉が見える。海草の中から、白珊瑚が、チラチラ光っているようである。

「味のよいお酒がここにあります」

眠くて眠くてたまらないような、ぼっとした声で、うつとりとこう島子は呼びかけた。

「お飲みなさりませ、琢磨様」

そろそろと全身をうねらせた。寝返りを打とうとするらしい。仰向けあおむになろうとするらしい。

武士が一人立っている。

寝椅子の傍に立っている。

ほかならぬ三蔵琢磨である。

冷然として立っている。島子の嬌態など見ようもしない。顔など決して充血していない。といって決して青ざめてもない。眼を正しく向けている。口を普通に結んでいる。足も決してふるえていない。こぶしなども決して握っていない。あくまでも冷静沈着である。

だが額の一所に、汗の玉のあるのはどうしたのだろうか？

木彫のように黙っている。だがもし彼が物をいつたら、ふるえないということがどうしていえよう。

ふるえ声を女に聞かれるのを、恐れて物をいわないのかもしれない。

なぜ彼は島子を見ないのでろう？　そういう女の嬌態などに、感興をひかないたちだからだろうか？　そういうようにも解される。だがその反対にも解される。そういう嬌態の誘惑を恐れ、それで島子を見ないので。

だが彼はある物を見てはいた。

彼の正面に壁がある。そこにある物がかかっていた。文政時代に似つかわしくない、外国製の柱時計であった。

黒檀の枠、真鍮の振り子！　振り子は枠から長く垂れ、規則正しく揺れている。で、そこから音が聞こえる。カチ、カチ、カチ、カチ、……カチ、カチ、カチ！　——セコンドを刻む音である。

長針と短針とが矢のように、白い平盤の表面に、矩形をなして突き出ている。その周囲を真円に囲み、アラビア文字が描かれてある。短針は十二時を指そうとしている。しかし長針は十時にあつた。

カチ、カチ、カチ、……カチ、カチ、カチ、……時は刻々に移って行く。

「十分前だ！」

呻くような声！ 琢磨の口から出たのである。冷静な顔や態度にも似ず、息詰まるような声であることよ！

カチ、カチ、カチ……カチ、カチ、カチ！

時は刻々に移って行く。

二人の男女を包んでいるところの、部屋の様子というものも、まことに異様なものであった。

十二

とはいえ今日の眼から見れば、洋風の書齋に過ぎないのではあるが。

壁の一方にドアがあり、壁の一方に窓があり、巨大な書棚が並んでおり、書物がギツシリ詰まっております、数脚の椅子と卓とがあり、洋燈が卓の上に燃えており、それに照らされて青磁色をした、床の氈かじが明るんでおり、同じ色をした窓掛けが、そのひだにかげをつけ

ており、高い白壁の天井の、油絵の図案を輝かせている。——というまでに過ぎなかった。とはいえ時代は文政である。所は江戸の郊外である。そういう時代のそういう所に、こういう部屋のあるということは、かなり驚いてもよいことであつた。

さらに驚くべきものがあつた。

とはいえそれとて一口にいえば、一枚の張り紙に過ぎないのではあるが——だがその張り紙に書かれてある、四ツの箇条書きを見た人は、非常に驚くに相違ない。

時計の真下、振子の下に、張り紙は張つてあるのであつた。

「八分前だ！」

呻くような声！ 琢磨の口から出たのである。

と、島子の声がした。

「こちらをお向きなさいまし」

だが琢磨はまたいった。

「四分前だ！ もうすぐだ！」

「こちらをご覧なさいまし。きつと見る事が出来ましょう！ 私の肌を！」
やっぱり琢磨呻くようにいう。

「三分前だ！ もうすぐだ！ そうしたら解放されるだろう！」
あせった島子の声でした。

「あなたは見る事が出来ましょう！ 私の肌を！」

だがまた呻くように琢磨がいった。

「後二分だ！ 後二分だ」

同じく呻くように島子がいう。

「ご覧なさりませ！ ご覧なさりませ！ 白い私を！ 真つ白い私を！」

「後一分！」

「素裸すはだか体の私！」

だが、その時音がした。

十二時を報ずる時計の音！

同時に庭から声でした。声というより悲鳴であつた。しかも断末魔の悲鳴であつた。しかも二人の悲鳴であつた。

同時に寝台からも声でした。これもやつぱり悲鳴であつた。やはり断末魔の悲鳴であつた。

ギーツ！ 音だ！ ドアが開いた。

「あなた！」

「娘か！」

「いいえ葉末！」

「葉末というのか？」

「あなたの花嫁！」

ひらかれたドアから現われたのは、花嫁姿の葉末であった。

「おいで！」

と琢磨、手をひろげた。

で、葉末と三蔵琢磨、はじめてやさしく抱擁した。

その時壁からヒラヒラと、床の上へ落ちたものがある。

四カ条を記した張り紙である。

風かないしは幽霊の手か？ どつちかがその紙を壁から放し、床の上へ落とすに相違ない。

「何んでもなかつたのでございますよ。つまり私の役目といえは、用心棒に過ぎなかつたので。原因は四カ条を書き記した、張り紙なのでございますよ。で、それからいうことにしましょう。(一) 養女と良人と結婚すれば、財産は官へ寄附する事(二) 養女が二十歳になるまでに、養女が死ぬか良人が死ぬか、ないしは二人死去するか、そういう場合には財産は、全部情人が取るべき事(三) 養女満二十歳になった瞬間、その養女が誰かと結婚すれば、財産は養女と良人とが、半分ずつ分けて取るべき事(四) 養女が二十歳になるまでに、良人が他の女と結婚すれば、財産は情人と養女とが、半分ずつ分けて取るべき事。——というのが四カ条の箇条書きなので。そうしてこれを書いたのは、養女——すなわち葉末さんですが、その葉末さんの養母であり、そうして三歳琢磨氏の家内、陸女という女だということ。情人というのは他でもない、花垣志津馬という武士なのだそう。遺言状だったのでございますよ。陸女の死ぬ時の遺言状だったので。その陸女という女ですが、ある札差しの家内にしては、大変な財産を持っていたそう。そうして後家さんになってから、琢磨氏と同棲したのだそう。しかし自分の財産だけは、自分で持っていたそう。

す。そうして非常な漁色家で、花垣という美男の浪人と、関係していたということですが、子が一人もないところから、葉末さんという娘を養女にしたところ、どうやら養女の葉末さんと、良人の琢磨氏とが愛し合っているらしい。で、嫉妬をしたのですね。そのうち死病にとつつかれ——業病だったということですが——死んでしまったのでございますよ。ところが死んで行く前までも、養女と良人との関係が、どうにも心にかかってならない。そこでそんなような遺言を——とても意地の悪い遺言を、残して行ったのだということとです。ナー二本人は死んでいるんだ、そんなつまらない遺言なんか、履行しなくたっていいのですが、その琢磨氏という人が、西洋の学が大すきで、こっそり研究しているうちに、死者の遺言というようなものを、尊重するようになったので、こだわってしまったのでございますね。だがやり口がひどいといので、時々夜など遺言状の前で、生きてる女房に話しかけるように、大きな声で口説いたそうです。つまり非難をしたという訳で。……ところが遺言の中身ですが、よめばお解りになる通り、琢磨氏は葉末さんと結婚は出来ない。結婚すれば財産は、官へ没収されてしまう。葉末さんが二十歳になる前に、葉末さんも琢磨氏も死ぬことは出来ない。一人死んでも二人死んでも、財産は情人の花垣志津馬に、みんな取られることになる。で二人ながら注意して死なないようにしなければなら

い。葉末さんが二十歳になる前に、琢磨氏は誰とも結婚出来ない。もし琢磨氏が結婚すれば、財産は葉末さんと花垣とで、折半をして取ってしまう。ところで一方葉末さんとしては、満二十歳になった瞬間とき、ぜひ誰かと結婚しなければならぬ。もしその時結婚すれば、財産は葉末さんと琢磨氏とで、折半をして取ることが出来る。……しかるに一方花垣としては、葉末さんが二十歳になる前に、葉末さんを殺すか琢磨氏を殺すか、ないしは二人と一緒に殺すか、とにかくなきものになければならぬ。そうしてそれに成功すれば、財産はすっかり手にはいる。が、もしそれが出来なければ、何者か美人を差し向けて、琢磨氏を誘惑し、ぜひとも結婚させなければならぬ。そうしてそれに成功すれば、全財産の半分だけを、自分の手の中に入れることが出来る。そこで花垣志津馬ですが、一方島子という自分の情婦を、琢磨氏の家へ入り込ませ、琢磨氏を誘惑させたそうです。大変もないうとう誘惑に勝ったそうです。負けた島子はくやしがつて、舌を噛んで死んだということですが、いつてみれば天罰てきめん面でしょう。さらに一方花垣志津馬は、無頼の浪人を手下とし、葉末さん誘拐を企てたり、琢磨氏殺害を巧たくんだり、いろいろ奸策をしたそうです。そうして養女の葉末さんが、満二十歳になる晩には、衆を率いて自分から、琢磨氏の屋敷

へ切り込んだそうで。で、そいつを退治たのが、私だったのでございますよ。もつとも私以外にも、弁吉、右門次、左近などという、三人の忠義の家来があつて、花垣部下の浪人を、三人がところ叩つ切り、災いを根絶しましたがね。……その三人で思い出しました。今考えてもおかしな話で、私はそれら三人へ、ピシピシ平打ちをくれたもので。ごろつきだと思ひましたので。つまり葉末さんをかどわかそうとした、ならずものだと思ひましたので。いやまた事実そうでもあつたのです。というのは外でもありません、そんなような狂言をすることによつて、手のきく武士を味方につけ、花垣一派の切り込みに、備えようとしたのでございますよ。……そうして娘の葉末さんさえ、もし承知をするようなら、私と夫婦にさせようと、事実琢磨氏は考えていたそうで。ところがどうもこの拙者、葉末さんの御意ごいにかなわなかつたと見え、真似事の結婚をしたばかりで——さようさようその晩に、私とそうして葉末さんとは、結婚をしたのでございますよ、さようさよう真似事まねごとのな。それをしないと大財産が、琢磨氏と葉末さんに行きませんので。……話といえばまずザツと、こんな次第でございます。——さあその後あのお二人、琢磨氏と葉末さんとは、どんなくらしをしているやら、参つたこともありませんので、とんと一向存じませんが、琢磨氏は学者で人格者、恐らく独身で書齋に籠もり、その西洋の学問なるものを、勉強してい

ることでもございましょう。ええとそうして葉末さんは、事実琢磨氏を愛していたので、西洋の言葉でいいますと——これは琢磨氏に聞いたのですが、何んとかいったっけ、プラトニック・ラブか——心ばかりの恋をささげ、肉体は依然として処女のままで、奉仕していることでもございましょう。……いや、何んにしてもあの晩は、私にとって面白かった晩で、劍侠になったのでございいますからな。アツハツハツ、思い出になります」

青空文庫情報

底本：「怪しの館 短編」国枝史郎伝奇文庫28、講談社

1976（昭和51）年11月12日第1刷発行

初出：「サンデー毎日」

1927（昭和2）年6月15日号

入力：阿和泉拓

校正：多羅尾伴内

2004年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

怪しの館

国枝史郎

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>